

2 多剤併用の解消によって速やかに抑うつ症状の改善をみた双極Ⅱ型障害の一例

佐々木明子・村山 賢一・阿部 亮

田村 立・染矢 俊幸*

新潟大学医学部附属病院精神科

新潟大学大学院医歯学総合研究科

精神医学分野*

わが国ではうつ状態に対して複数の抗うつ薬が治療早期から併用される傾向にある。しかし、抗うつ薬の併用療法には、効果と副作用の判定の困難化、副作用の増加、薬物の相互作用の出現等の危険性がある。我々は今回、多剤併用で治療されていた67歳、女性、双極性障害Ⅱ型・うつ状態・中等症の症例において薬剤整理により症状の改善をみた。入院当初は表情の表出に乏しく、質問に対してもしばらく間を置いてかすかにうなづく程度であり、歩けないと言い車椅子に乗り、食欲低下のため経管栄養が施行されていた。入院までの処方は、パキシル(10)3T、トフラニール(25)3T、ミラドール120mg、タスモリン1.5mg、セルシン6mg、ベンザリン10mgであった。入院時より、パキシル(10)3T、セルシン6mgのみで経過を見た。翌日より徐々に口調がはっきりし、会話する声も大きくなり、入院時認められた質問に対する反応の乏しさやのろさ、動きの緩慢等は速やかに改善し、第5病日には独歩可能となり、会話もスムーズになった。抑うつ気分も改善し、経口摂取量も徐々に増加し経管栄養は中止できた。その後気力低下は残ったが、第28病日リーマス400mgを開始し、副作用の出現なく改善をみた。

3 多剤併用からリスペリドン単剤への切り替えが著効した統合失調症の一例

百瀬 能成・細木 俊宏・豊岡 和彦

阿部 亮・田村 立・染矢 俊幸*

新潟大学医学部附属病院精神科

新潟大学大学院医歯学総合研究科精

神医学分野*

多剤併用療法により症状が改善せず、risperidone単剤への切り換えにより幻聴や妄想、陰性

症状が著明に改善した一例を経験した。症例は38歳女性。X-20年(高校3年時)より「他人と話すとおならが出てしまう」という自己臭妄想様の訴えがみられ始め、薬物療法等が行われてきたが、大学卒業後から幻聴が出現し、改善せず慢性の経過をたどっていた。その後関係妄想を認めるようになり、自分の行動を指示する複数の幻声のために他人とコミュニケーションをとることができなくなった。また「考えが頭から漏れ出てしまう」、「相手に伝わってしまうようだ」といった自我障害や、意欲の低下や感情の平板化などの陰性症状が認められた。そのため仕事に就いても長続きしなかった。X年12月、幻聴に操られ、作中に突然踊り出したため、前医に入院し、chrolpromazineやhaloperidolなどの従来型抗精神病薬による多剤併用療法が行われていた。しかし幻声、関係妄想、自我障害、感情の平板化は持続し、幻声に影響されて椅子を投げてガラスを割るなどの問題行動が続くため、家族、本人の希望によりX+1年6月に当科へ転院となった。転院後、risperidone投与を開始し、処方されていた数種類の抗精神病薬を漸減したところ、幻覚・妄想および感情の平板化等の陰性症状も改善したため退院となった。本症例では症状が持続するため多剤併用となったが、副作用が出現しており単剤への切り換えが必要と考えられた。risperidoneは幻覚、妄想などの陽性症状のみならず陰性症状の改善にも効果があり、錐体外路症状をはじめとする副作用が少ないといわれている。そのためrisperidone単剤への切り換えを行い、有効であった。本症例を通じて、多剤併用療法の欠点および非定型抗精神病薬の利点について検討及び考察を行なったので報告する。